一年生が、あそび方が分かって【すぐあそべる】と思う　おもちゃのせつ明書を書こう！

発行
令和４年 11 月１日
中部教育事務所

いの町立伊野南小学校

教材　第２学年　「あそび方をせつ明しよう」（東京書籍　２下）

単元計画（全７時間）

言語活動		学習過程	時間	学　習　内　容
一年生があそび方が分かって【すぐあそべる】と思う おもちゃのせつ明書を書こう。	1次	題材の設定 情報の収集 内容の検討	1	単元の見通しを立て、１年生におもちゃの遊び方の説明書を書くことを確認する。
			2	遊び方の説明に必要な事柄を付箋に書き、整理する。
	2次	構成の検討	3	分かりやすく説明するための文章の書き方を考える。
		考えの形成 記述	4・5	整理したことをもとに、遊び方を説明する文章を書く。
		推敲	6 本時	文章をよりよくするために、自分で読み返したり、友だちとペアで読み返したりする。
	3次	共有	7	遊んでみた感想を１年生からもらい、単元を振り返る。

本単元で身に付けさせたい資質・能力　（重点指導事項）
「B　書くこと　」エ　推敲
◇文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりすること。

本時で達成したい目標
◇一年生により伝わる文章にするために、自分で読み返したり、友だちと読み合ったりして間違いを正すとともに、語と語や文と文とのつながりを確かめることができる。

本時の展開

一年生が読んで【すぐ遊べる】と思う説明書にするために、教師の BAD モデルをもとに推敲する観点をおさえる。その後、おもちゃの遊び方について書いた自分の文章を観点に沿って読み返し、より伝わる文章になるよう推敲する。語と語や文と文とのつながりを意識して自分で読み返し、本当に伝わりやすい文章になっているか、ペアで確かめ合う。その後、より伝わる文章になったことを全体で共有する。

学習活動	指導上の留意点
1　本時の課題をつかむ。 書くときのポイントに気をつけて読み直そう。	・前時にどういったことに気をつけて文章を書いたのか確認したり、友だちと振り返りを共有したりすることで、学習への意欲を高める。
2　推敲の観点を確かめる ・順序を表す言葉をつかっているか。 ・「は」「へ」「を」の使い方、句読点の打ち方は正しいか。 ・つけ足す言葉はないか。	・前時までに使用してきた「書くときのポイント」をまとめた模造紙や、教師の BAD モデルを示し、推敲するときの観点をおさえる。
3　自分で読み返す。 **4　友だちとペアで読み返す。**	・間違いがないか声に出して読み返すことを声掛けし、観点に沿って読み返すことを確認する。 ・ペアで読み返す際は、読み返す活動のモデルを示し、どこに気を付けてやりとりをするのか、イメージを持たせる。
5　全体で交流する。 **6　振り返りを書く。**	・変化が大きく見られた児童を指名し、推敲前の文章と推敲後の文章を教材提示装置で提示し、より伝わる文章になったことを全体で確認する。 ・本時の学習でどんなことが分かったのか、自分の文章をどのように推敲したのか振り返らせ、次時の学習への意欲付けを図る。

授業づくりのポイント

①　当該学年で求められる、観点を持たせた推敲

「推敲」というと「誤字・脱字を直す」、あるいは「平仮名を漢字やカタカナ表記に直す」等を思い浮かべがちではないだろうか。確かに、間違いを正すという点においては、大事なことの一つである。しかしながら当該学年の「推敲」、本単元で身につけさせたい資質・能力は「文章を読み返す習慣を付けるとともに、間違いを正したり、語と語や文と文との続き方を確かめたりすること。」である。推敲は、ア、イ，ウ、オの指導事項とも密接なかかわりがある。〔図１〕推敲の前の学習過程「ウ　考えの形成・記述」で求められる資質・能力は「語と語や文と文との続き方に注意しながら、内容のまとまりが分かるように書き表し方を工夫すること。」である。したがって、推敲の際には、これまでの過程で注意しながら書いたことが観点になるのである。つまり、「は」「へ」「を」や句読点の打ち方が正しくできているか、「はじめに」「次に」など順序を表す言葉を適切に使いながら文と文とをつなぐことができているか、そして、文がより分かりやすくつながるように、新たにつけ足す言葉、もっと分かりやすい言葉はないか…などと、図２に示したように、児童が言葉による見方・考え方を働かせていく。中学年・高学年と学年が上がるにしたがって、当然推敲の観点もそれぞれの学年の学習過程と関連しながらグレードアップしたものになっていくので、系統性を確認して推敲の過程を踏ませていくことが大切である。

図１

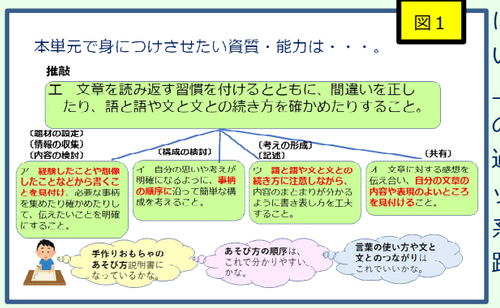
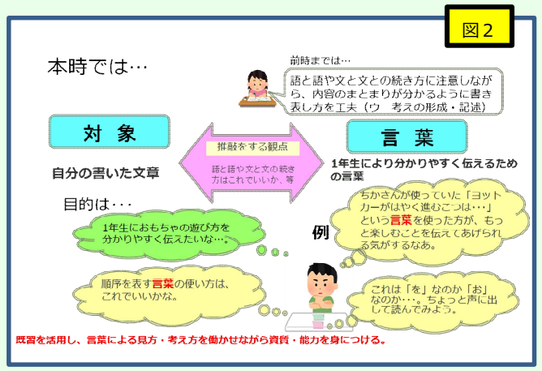


図２



②　児童の振り返りをもとにした協議を～書いた振り返りから何を見取ってどのように授業改善するか～

伊野南小学校では、振り返りを活用した授業改善に取り組んでいる。本時では、授業終末において「友だちに自分の文章を読んでもらって、ここがよかったよというところを書いてください。」という教師の声掛けのもと、「ｋちゃんと交流したら自分では気付けなかったことに気付くことができました。①」「はじめは難しかったけど、考えたらだんだん分かってきて…②」「交流したら３つ直されて、終わった時に見直したら本当にその通りだったし、すごく嬉しかったです。」等、それぞれの児童が、自分の文章を１年生により伝わるものにするために推敲したことを振り返りながら書くことができていた。

事後の協議では、実際の児童のノート（振り返り）と、指導案の中に書かれた、教師が描いた「本時に育成したい資質・能力に向かって期待する振り返り」とを比べ、それぞれのグループで協議することができた。こうすることは、本時でどのような児童の姿を目指したかったか、どういった働きかけが必要だったかをより具体にして授業改善に迫れるという面で効果的である。

本時に育成したい資質・能力に向かってさらに歩を進めるためには、机間指導の際、書いている途中でも状況に応じては一度作業を中断して問い返し、全体で確認することが大切である。①の振り返りについては「何に気付いたの」や、②については「どんなことが分かってきた？」等、自分の書き足すべきところに気付かせた上で、続きを書かせることで、学びをより自覚できる振り返りとなるようにする。あるいは次の授業の冒頭においてこれらのことを取り上げ、再度どこに着目して推敲したかということをおさえることが、児童にとっては自分の学びをさらに自覚する「学習改善」につながり、教師にとっては「短いスパンでの授業改善」つながる。

③効果的に ICT を活用する（ICT の活用・構成メモ）

今回、児童は「構成の検討」の過程で、遊び方の説明の順序を考える際、タブレットの付箋機能を用いて、自分が説明する事柄を並び替えながら、書く事柄を整理していった。このような活用は、説明の順序を思考しながら並び替えたり、友だちと共有したりする際に付箋の落下、紛失等を防ぐことができ、保存も確実にできるという面で、大変効果的である。

また本時では、推敲する前の文章と、推敲した後の文章をテレビ画面に映し出して、どこをどのように推敲したのか、クラスの友だちに向けて発表し、より伝わる文章になったことを共通確認する場面も設定されていた。

④参加者・授業者の声

・「指導したことを評価する」ために、指導するべきポイントを授業の中に確かに組み込んでいきたい。系統性の重視や、子どもの実態を把握することが大切と感じた。〔参加者〕
・今回参加したことで、振り返りのことが大きな収穫だった。あいまいな記述をそのままにしておくのではなく、突っ込んで具体的に問うていくこと（それはどうして？等）を大事にしていきたい。〔参加者〕
・振り返りの大切さを実感した。始めは書くことに抵抗があった児童も徐々に慣れていっている。児童が書いた振り返りを教師がどう生かすか。それが今後の自分の課題である。〔授業者〕